

近畿地方およびその周辺の 経塚・祭祀遺跡出土鏡についての研究

清水 梨代

はじめに

和鏡は出現そのものが日本の鏡生産における画期であったばかりでなく、日本の古代末から中世における社会システムや製品流通の転換期とも期を一にしており、むしろ古墳時代や奈良時代の鏡よりも当時の社会と密接に繋がっていたものと考えられる。そこで確実な鑄造遺跡（供給地）のある近畿地方とその周辺の経塚・祭祀遺跡出土鏡を考古学的、美術工芸史的手法に科学的手法を加えた調査・研究をすることにより、鏡を通して当時の生産（製作技術も含む）・流通・社会についてより一歩踏み込んだ研究を目的とするものである。

第一章 研究史

中世・近世の鏡の研究において、各部の名称や編年等の最も重要な各研究の骨格については戦前の在野の研究者である廣瀬都巽氏により作り上げられたといえる。戦後に入ると中野政樹氏によって金工史の一分野としての地位が確立され、更に前田洋子氏により考古遺物としての考古学的視点からの研究が行われ、現在では久保智康氏によってこの方向性は踏襲され、大きな成果を挙げるにいたっている。一方、和鏡が出土する可能性が極めて高い遺跡である経塚の研究においては石田茂作氏によりその骨格が作り上げられた。これはその後の研究に多大なる影響を与えており、むしろ氏の研究を超えるものは存在しておらず、その細分的研究が進んだと考えられる。尚、今日に

おける経塚研究の最大の問題点として経塚研究を左右しかねない重要な経塚の報告が出ていないということが挙げられる。この報告が出ない大きな要因の一つにはこれらの経塚の当時の発掘担当者の死去や高齢化に伴い当時の発掘状況が判らなくなってきたという現実がある。

第二章 近畿地方およびその周辺の経塚・祭祀遺跡出土鏡

対象としたのは近畿2府4県および福井県の20遺跡であり、原則として実見した鏡のみを扱った。尚、調査方法としては以下のような手段を用いた。

① 肉眼観察

② X線透過写真による観察

肉眼では観察できないヒビ等の有無をはじめとする現状や鍔掛の有無、鏡背文様の確認等を目的とした構造調査

③ エネルギー分散型蛍光X線分析器による元素分析

鏡胎の地金の材質および、水銀の有無の調査

④ 従来の考古学的・美術工芸史的調査

周縁の形態・鈕型・界圜の有無・文様のタッチおよび構成の四要素を中心に出土遺跡の概要等を合わせて検討する。

第三章 考察

第一節 和鏡の鏡式および組成による分類

I 深山寺経塚および舞崎経塚出土鏡の組成による分類

深山寺経塚および舞崎経塚出土鏡は所蔵者である敦賀市教育委員会のご好意により、メタル（地金）を出して分析することのできた鏡である。これらが大雑把に分類すると次の3つに分類することができた。

I群：銅、錫、鉛を主成分とし砒素、銀を微量に含有する鏡＝和鏡

深山寺経塚、舞崎経塚出土鏡に関してはいわゆる一般的な和鏡の大部分がこれにあたる。尚、8世紀の東大寺の鑄造遺跡出土スクラップや長登銅山の

銅鉛石等の分析結果および明代の技術書『天工開物』等から考えると南蛮吹き以前の日本産の銅には銀や砒素が不純物として含有されていたことが推測されることから、これらは少なくとも原材料の一部に国産銅を用いて作られた鏡であるといえる。

Ⅱ群：銅、錫、鉛を主成分とし、砒素、銀を含有しない鏡＝湖州鏡・素文鏡
 深山寺経塚、舞崎経塚出土鏡では湖州鏡、素文鏡は各2面ずつであったが、これらに関しては、僅かであるが他の分析事例がありそれらもこれらと同様の結果を示している。なお、和鏡の一部がこのグループに入ってくるが、これらは輸入銅のみを用いて鑄造された鏡であると考えられる。

Ⅲ群：銅、錫を主成分とし鉛、砒素、銀を微量に含有する鏡

＝金属質な銀色光沢を持つ鏡（いわゆる白銅鏡）

深山寺経塚、舞崎経塚出土鏡では僅かに2面であったが明らかに他の鏡とは組成の異なる一群であり、成瀬正和氏による唐式鏡の組成による分類で国産鏡とされる一群に極めて近い組成を有する。

以上のことから考えると少なくとも、深山寺経塚、舞崎経塚出土鏡に関しては組成の違いから3系統の異なる工房、または工房グループによって作られたと考えられる。この大まかな意味での組成の違いは原材料の入手ルートの違いや工房による差異を表していると考えられ、これと鏡式の差異が一致すれば文様が異なっても同一系統の工房で作成された可能性を示唆できるものと思われる。このことから深山寺1号経塚と3号経塚は一部例外はあるものの、ほぼ別系統の工房で作成された鏡を埋納していると考えられ、すでに久保智康氏が指摘していたように入手ルートの違いを裏付ける結果が出たといえる。

Ⅱ 鍍錫に関する諸問題

鏡の水銀による鍍錫がいつから行われたかについては諸説があり、一説によると中国漢代に始まったとも言われている。しかしながら、日本における鍍錫の始まりがいつであるかについて述べた論考は今のところ見当たらない。

い。今回の研究における科学的調査の最大の成果の一つがこの鍍錫についての問題であり、その成果とは以下にあげるものである。

- ① 原則として和鏡からは鏡面、鏡背双方から水銀が検出された。すなわち、これは和鏡全体に対して鍍錫が行われていたことを示している。従来から鏡面に対する鍍錫に関しては示唆されていたことであるが、鏡背にも同様の鍍錫が施されていたことが確認された。また、湖州鏡、素文鏡に関しては原則として鏡面からのみ水銀が検出されている。ただし、素文鏡については分析事例が少ないため、はっきりとしたことは言えないが、少なくとも今回分析を行えた資料に関しては鏡面、鏡背のどちらからも水銀の検出は認められなかった。尚、化学分析の事例はないが近年、朝鮮半島や中国で多数発見されている和鏡の踏み返し鏡も鏡面のみの鍍錫であったと推測される。以上のことから、鍍錫のあり方が日本と中国では大きく異なっていたことが判る。
- ② 京都市弁天島経塚より出土しているいわゆる白銅鏡である方鏡の分析結果からは水銀の検出は認められなかった。この方鏡は鏡式から少なくとも和鏡への過渡期の鏡とされる瑞花双鳥八稜鏡と並行時期もしくはそれ以前の鏡と考えられる。尚、現在のところ正倉院宝物の鏡や海獣葡萄鏡等の唐式鏡の出土品からも水銀が検出されたという報告は無く、更には「石山寺鑄鏡用度文案」や『延喜式』といった鑄鏡関係の文献史料においても水銀の記載は見られない。文献史料上、鏡磨きが登場するのは筆者が確認した限りにおいては13世紀以降である。今回調査できた鏡の中で水銀を検出した最も古い鏡は瑞花双鳥八稜鏡の一変身形体である兵庫県氷上郡春日町多利前田遺跡出土瑞花鴛鴦鏡である。以上の事から今後の瑞花双鳥鏡の化学分析事例の増加にかかってくるといえるが瑞花双鳥八稜鏡のいずれかの段階、少なくとも多度式鏡が登場する時期には鏡面、鏡背双方に鍍錫が行われていたものと考えられる。

Ⅲ 和鏡の鏡式および組成による分類

以上、Ⅰ・Ⅱの考察及び鏡式から今回、調査することができた鏡を分類すると以下のようなことが推察される。

- ① 今回分析できた鏡のデータを大雑把に分類すると前述したⅠ～Ⅲ群に加えてⅣ～Ⅵ群に分類することができる。Ⅳ群は銅、鉛を主成分とし錫や砒素等を微量に含有する鏡であり、Ⅴ群はほぼ銅のみを主成分とし、錫、鉛等を微量に含有する鏡である。また、Ⅵ群は銅、鉛、砒素を主成分とする鏡である。砒素は鉛や安輝鉱ともいわれたアンチモン同様、銅に加えることによりその融点を下げ、合金の色を白くするという働きがある。日本においては古代より錫が高価であったこととあわせて考えるとⅣ群の鉛とⅥ群の砒素は錫の代用品として利用されていたと考えられる。
- ② 三重県嬉野町中尾垣内遺跡出土山吹双鳥鏡の鑄掛部分は明らかに本体部分とは異なる組成をしていることから鑄掛に用いる湯は本体部分よりも鉛等をより多く含む融点の低い扱い易いものを用いていたことが判明した。
- ③ Ⅱで前述したように原則として和鏡からは鏡面、鏡背双方から水銀が検出されている。それに対して湖州鏡からは原則として鏡面からのみ水銀が検出されている。このことから、日本と中国では鍍錫のあり方が大きく異なっていたことが判った。
- ④ 今回、九州や東北の出土鏡も含めると総数約300面以上の鏡を実見することができた。その結果、文様構成全体から同一工場の作であるかどうかといった製作主体ごとの類型化を図ることは難しいが鶴を輪郭表現で表し、松枝を三角形状に表現する捻菊座鈕を伴う細縁の松喰鶴鏡は同一工場で作られた可能性が高いなど文様意匠単位ごとであれば、その表現手法の特徴から製作主体ごとの類型化を図ることができる可能性があるといえる。

第二節 いわゆる中縁直角の白銅鏡について

以上、第一節で見てきたようなことを踏まえると、あくまで今回調査した鏡の中でのみの話であるが、中縁直角の白銅鏡には共通的な特徴が認められる。1つは鏡式における特徴である。中縁直角という共通の縁型を持っているのみならず、ほぼ11cm前後の径をもつ鏡には必ず花蕊座鈕が伴い、文様の鏡押しも肉高なものとなっている。一例であるが京都府宇治市白川金色院経塚出土秋草蝶鳥鏡と和歌山県橋本市隅田八幡神社経塚出土草花流水双鶴鏡は出土地や文様はまったく異なるものの中縁直角の縁型、花蕊座鈕、11cm前後の径、肉高な鏡押しによる文様を持つのみならず、ほぼ同様の高錫青銅の組成を持っている。以上のことからこの2面の鏡は少なくとも同一系統の工房、更に限定すれば同じ工房で作られた可能性が極めて高いと考えられる。また、これらのことから考えると組成分析を行っていない為、確実なことは言えないが同様の特徴を持つ白銅鏡である三重県多度町多度神社経塚出土佛桑花蝶鳥鏡、菊山吹蝶鳥鏡や京都市弁天島経塚出土秋草文鏡も同様であると考えられる。以上のことから考えると文様構成の異なる鏡であっても鏡式および鏡押しのタッチ、組成が同様であれば同一系統の工房で作られた可能性を示唆できるものと思われる。その意味では中縁直角の白銅鏡の分布からその流通を知ることができる可能性は極めて高いものと思われる。また、白銅製の和鏡は概ねシャープで肉高な鏡押しによる鏡背文様を持つものが多いだけでなく、近畿地方のみに限定しても出土鏡全体の総数からすれば白銅製の和鏡の出土量は極めて小さいものである。その意味では白銅製の和鏡は鏡式が異なっても材質的な共通点から同一系統の工房、少なくともお互いに何らかのかかわりのある工房といったごく限られた系統の工房のみで作られたものであると考えることができるのである。

結語

本研究は従来の考古学的、美術工芸史的手法に科学的手法を加えることに

より中世・近世の鏡のより一步踏み込んだ研究を目的としたものである。その意味では従来見えてこなかった鍍錫の問題や花蕊座鈕を伴う中縁直角の白銅鏡についての新たな知見など基礎的研究としては一定の成果があったといえる。また、問題点としては科学的調査が移動に伴う問題等から思うほどに進まなかった点が挙げられる。その意味では今後のポータブル式小型蛍光X線分析器の精度の向上と普及しただいでは大きく進展できる可能性は極めて高いといえる。尚、和鏡の生産・流通てについての今後の進展は和鏡の出土地の歴史的背景についてよりいっそう理解を深めていく必要があると同時に生産地である鑄造遺跡からの鏡の出土とその分析にかかっていると見えよう。

【注】

日本における鏡の変遷はおおよそ唐式鏡→瑞花双鳥八稜鏡→多度式鏡（宋式鏡）→和鏡（→柄鏡）の順に推移するとされている。しかしながら実際には同時並行的に存在し、各々がお互いに影響を与え合い、新しい要素を取り入れながら漸移的に進んでいったというほうが妥当である。また、和鏡は大きくは細縁鏡、中縁鏡、厚縁鏡の3つに分類される。これらは細縁鏡→中縁鏡→厚縁鏡と土器のように整然と進行するのではなく多少の時期のずれはあるもののおおよそ同時並行的に存在しているため単系的な変化傾向を追うことはほぼ不可能である。